

第一章 雪の殺人者

1

黒部の秘境にも春が訪れようとしていた。立山連峰の白い峰々はまだ冠雪をいただき、一部、黒部湖にも氷が張り付いていたが、平地に立つブナ林の枝々は、すでに、雪が払われていた。

もつとも、四月の声を聞いたとは言え、本格的な春の訪れにはまだほど遠く、樹々の枝はそそげ立った針の矢を天に向けていた。

黒部湖畔に湛（たた）えられた水も、曇天の薄陽に照らされているので灰緑色に見えた。

日報新聞富山支局の記者、仲条立彦はこの春先、取材活動でもう何度も、まだ冬景色を残した黒部湖畔にやって来た。

例年、一般の観光客を迎え入れるのは四月下旬の山開きのフェスティバルが行われたあとのことだった。

いまはまだ除雪作業や、鉄道路線の架線などの修復、点検がすすんでいる最中で、黒部湖に至るルートは長野側からも、富山側からも完全には開けていない。

つまり、豪雪地帯なので十月末から四月下旬頃までは、観光ルートは閉鎖され

、一部の冬山登山を目指すアルピニストたちだけが、足を踏み入れる地となるのであった。

四月十二日、この秘境の地で失践事件が発生した。

山岳写真家、庄川征雄（しょうかわまさお）が黒部湖畔から望む立山連峰の山々を撮影する目的で単独で入山、その後、消息を絶ったのだ。

三日間の予定で山に入ったのに、庄川征雄は一週間経っても戻らず、家人から届け出があつて、富山県警山岳警備隊が出動、入山可能範囲の領域をヘリコプターと陸路による人員配置で搜索したが、結局安否は確認できず、搜索開始一週間で搜索は断念された。

庄川征雄行方不明事件の取材のために、仲条も、まだ完全には交通路の確保されていない黒部湖まで何度も足を運ぶことになったのだ。

一騒動があつたあと、四月二十日、仲条は明るいニュースを求めて黒部湖畔、赤沢岳の麓の沢地にある千の平小屋の主人、小矢部吾平を訪ねたこれからの山開き、観光シーズンに向けての最新情報を取材するのが目的だった。

千の平小屋の主人、小矢部吾平は五十六歳、いまは一人で、山小屋を守っていた。

厳寒期には人が棲むことを拒否する豪雪地帯なので、吾平は大体のところ、秋半ばの十月末までには山小屋を降り里地に住んだ。

吾平は山男としても知られた人物で、がっちりした体格をしていた。張った顎に、人を見据えるような眼、それに、どこか人付き合いの悪いところもあって、初対面の者は、吾平にあまりいい印象を持たない。

短髪だったが、髪はばさばさ、半分白髪のままだった針毛は立ったままだった。

すでに建物の外回りの整備、手繕（てつくろ）いは了えていて、吾平は囲炉裡端（いろりばた）で、客の仲条を迎えてくれた。

「この前は遭難騒ぎで、小矢部さんのところもたいへんだったでしょう」と、はじめに仲条は声を掛けた。

千の平小屋は庄川征雄救助の前線本部になり、捜索員などが、大勢出入りしたことで、まだシーズン前なのに、千の平小屋は仮の宿泊所ともなったのだ。

「まあ、その話はひとまず止めにしておこう。ともかく、山岳写真家として二十数年、アルピニストとしてもベテランの彼が、魔の山に吞まれた。考えるだに辛いことだからな」

吾平は仲条から電話で事前に本日の取材目的を聞かされていたので、彼自身もその話題を避けた。

仲条立彦は二十七歳、地元の大学を出て四年目、彼はまだ新米の駆け出し記者の部類に入る。

「それでも五、六年前は川釣りの客もいたりして、イワナやニジマス、ウグイな

どの料理をわたしは 引き受けたものだ。この頃は世の中も変わって、山の中までやって来る釣客も減ったし、登山のためにこの小屋に立ち寄る山男たちもめつきり減った」

「冬山登山はともかく、他のシーズンはアルペンルートも開けて、軽装備でも登れる時代ですからね」

仲条は吾平に頷きを返した。

富山側からだとは立山線の電車に乗り、立山駅まで三十分、あとは立山ケーブルを利用すると七分で美女平（びじょだいら）に着く。さらに美女平からは弥陀（みだ）ヶ原を経て室堂（むろどう）へ、室堂から黒部湖まではトンネルバス、ロープウェイ、ケーブルを利用するルートと、富山地本線で宇奈月に出、黒部峡谷鉄道で櫛平（けやきだいら）に出る観光・登山ルートが開けている。

長野側からだとは大町からバス四十分で関電のトロリーバスの始発駅扇沢に出、赤沢岳の山腹に穿たれた関電トンネルを経て黒部ダムに至るルートが用意されていた。

交通の便が良くなったことで、昔男の吾平は山の仲間たちが千の平小屋に顔を見せなくなったことが、淋しいようだった。

「森中さんは東京で元気にしておられるかね。山登りが好きで富山支局勤め六年、本社にむりやり連れもどされて、体がなまっているんじゃないかな」

と吾平が問い掛けてきた。

「アスファルトジャングルじゃ、高いのはビルだけだよと、この前、電話で話をしたときこぼしていました」

「彼も北アルプスの山々に魅せられた一人だったからな」

そう答え、吾平は囲炉裡に新しい薪（まき）をくべた。煤（すす）けた暗い部屋だったが、雪の重味に耐えられるように太い柱で山小屋は支えられており眼の上に張りわたされた梁（はり）もがっしりしたものだった。

囲炉裡のある居間に、土間の台所、それに、客室が四つ、吾平が寝泊まりする部屋も入れて、二十人程度の宿泊が可能な山小屋の造りだった。

「今年是全国的に暖冬だったようだが、この天気ばかりはね。いまの気候じゃ、例年より五日は早く山開きができるんじゃないかと関係者は考えているが、山の天気は気紛れだ。やっぱり例年どおりがいいとわたしは主張しておいた。たしかに積雪量は例年に比し少ないが、早目に山開きしたところで、おいそれと客が来るでもないのに、金儲けの機会を増やそうという手合いが多くて困るよ」

吾平はぶっきら棒な口調で言った。

立山黒部アルペンルートが開け、便利になって山男たちが千の平小屋にあまり寄りつかなくなったことと言い、世の中の動きに吾平はついていけないようだった。雪を分けて早々に春の芽をのぞかせ

たふきのとうや、黒部ダムの側溝の穴に棲みついたイタチ科のオコジョが、もう早々に外に出て摂餌（せつじ）活動をしていることなどを、吾平は春の便りとして仲条の耳に入れてくれた。

「それはそうと、いまでも山の谷では泡なだれが起きているようだからな。突風でも吹き荒れれば、たちまち、このあたりも冬に逆もどりだ。この前の搜索も、その危険があり、二次災害を避けるために早々に切り上げられた。庄川のヤツ、充分に山の怖さは知っているはずなのに、つい、雪山の魔力に惹（ひ）かれて一歩一歩と踏み出してしまったんだろうな」

自分のほうから庄川征雄のことを話題にするのを避けたのに、二人の間に沈黙の時間があつたあと、吾平は、親友の庄川のことにより触れた。

庄川征雄は五十三歳の壮年で、吾平より年下だったが、二人は立山連峰の山々には精通した者同士だったから、今度の庄川征雄の行方不明事件は、吾平にも大きな衝撃になっていたのだ。

「生存の可能性はネまだ残されていますが：」

と、だけしか仲条は慰めのことばを掛けられなかった。

「行方不明になる前に、彼はここに二日間泊まった。昔話も含めてあれこれ話をした。まだまだ話すことはあつたのにほんとうに残念だ」

四月十日、十一日の両日、庄川征雄は写真撮影の足場にするために、千の平小屋に泊まったのちに、別のルートに入り、行方不明になったのであった。

仲条もしんみりし、吾平の話の聞き役にまわった。

「小矢部さんも、捜索に加わられたんですし、最善はつくされたんじゃないですか」

「それはそうだが：人間の足でこの雪の残る山、それほど遠くに行けるわけではない」

忽然（こつぜん）と庄川征雄は雪の山中に消えた？そんな謎の残る遭難事故だった。

「わたしと関電の職員と四人で冬期歩道を通り、黒部湖に着いた。あとはわたしと二人だ。つまり、わたしは庄川くんに最後に会った一人、これも運命だったのかな」

吾平は茶を啜（すす）り、感慨深げに言った。吾平が口にした冬期歩道とは、冬の期間、宇奈月から黒四ダムに通じるルートのことであった。

黒四ダムの保守要員二十名ほどの関電職員のために、荒天候の日を除き、二人一組のチーム編成で人力によって食糧や郵便物などが運ばれていた。

逋送隊（ていそうたい）と呼ばれている。トロッコ電車で親しまれている黒部峡谷鉄道の線路道の一部通り、約二十キロの道のりを隊員たちは歩む。このルー

トの大部分は人道トンネルとなる。

冬期歩道期間は、小矢部吾平も宇奈月の町で暮らしており、庄川征雄も宇奈月在だったので、お互い行き来もあり、親交を深めていた。

今度の撮影行では関電職員にむりを言い、二人は一緒に黒部湖を目指したのだった。

山小屋を一人で守り、俗世とは離れた生き方をしている者に見えて、若い仲条は、その吾平の横顔に、特別の感慨を持った。

昼日中のことだが、居間には高い天井から裸電球が一つぶら下がっていた。小屋の外は、おおいかぶさるように、ブナの裸の梢がおおっている。

まだ、太陽光を透さない季節だから、小屋の内は昼間でも暗いのだった。

「今夜は泊まっていきなさいよ。宿泊料はいただかないが、小屋の補修に人手が欲しくてね。息子は東京住まいで、小屋を継ぐ気はないようだ。そうだな、仲条さんとうちの息子、同じ齡だったな」

「クラスはちがいますが高校では同学年でした」

「ああ、そうだった」

前にも交わしたことのある会話を、二人はまたたしかめあった。

「何もないが、山菜鍋ということにして、有り合わせの物を用意した。今年の春物というわけにはいかんが」

吾平と仲条は囲炉裡端で向かい合い、地

酒を呑み交わした。季節だと岩魚（いわな）の骨酒ということになるのだが、まだ、本格的な釣りのシーズンではない。

午後からの時間、二人は力を合わせ山小屋の補強工事をした。傷んでいる屋根と、外から小屋を支えている突っかい棒の取り替え作業などに、仲条も手を貸した。

この山小屋には、取材のために、何度か仲条は来ているが、いつも、吾平に尋ねてみたいと思ったことで、時間切れのために、果たせないことがあった。

夜はいい機会なので、仲条は思い切って、胸の内にあつたことを口にした。

「森中先輩から、これも聞かされたことなんです。昭和三十八年に完成したこの黒四ダム、その後は一時、怪談がまことしやかに横行したようですね」

仲条はまず、話の核心にはせまらず、外濠から話を進行させた。

「その手の話、好きな連中は、いっぱいいるからな。何しろ、難工事で沢山の犠牲者を出した。黒四ダムの礎（いしづえ）になった者たちのみんながみんな、お国のために死んだというわけじゃない。この世に未練があつて、さまよう靈魂があつたとしても不思議ではないとわたしは思うよ。しかし、原発ばやりのいま、この黒四ダムも、いまは、観光名所になったが、電力供給という点で言えば、あまり効率はよくない。時の流れというか、価値観のズレをわたしなどつくづく考えさせられることがある。あと三、

四十年も経てば最後は湖畔の慰霊碑だけが残り、黒部観光ルートが後世に遺されるということになるかも知れないな」

熱燗をした地酒であたたまった吾平の顔は火照って見えた。お燗番は仲条がやっていた。吾平は酒には強い。

山小屋の一人暮らし、無柳（ぶりよう）を慰めてくれるのは酒しかない。

多少、量を過ぎしたので仲条は、もっぱら、吾平の盃に酒を充たしていた。

「小矢部さん、何もかも森中先輩の承け売りで申しわけないんですが、日報新聞に入りたての頃、ぼくは森中さんから、黒部ダム建設に関して、申し送り事項として妙な話を聞かされていましたね」

「ああ、その話なら、もう、何人もの記者に話をしたよ。黒部ダム建設で、人柱がたてられたのではという噂話がある。きみが訊きたいのはそのことだろうか？」

「それで、真相を究明した者はいるのですか？」

「いや。話には尾鰭（おびれ）がつくもので、その話、実は、わたしの完全創作なんだ。森中さんにもそう言ったが、彼はどうやら信じなかったようだな。わたし同様に、人を驚かせて、森中さんも楽しむ質らしい」

「完全創作？小矢部さんの？」

「ある夜、そうだな、たしか満月の夜だった。わたしはひとり、湖面の近くまで降りて、満々と水の湛えられた黒部湖を見ていた。昔から物語を作るのは好きなのでね

。そのせいもあるが、耿耿（「こうこう」と
冴え渡る満月が湖面に一つ映っているのを
眼にしたとき、何というか、魔の気という
か、そういうものを全身に感じてね。ほら
、よく言うじゃないか、月の光（ルナテッ
ク）は人を狂わす。月の狂気ということば
があるぐらいだから、わたしもその狂気に
、ひととき、取り憑かれたの、かも知れない
な。なぜだか、一つしかないはずの暗い湖
面の月が、わたしには四つに見えた」

「四つ？みんな満月の状態で？」

「いやいや、そうはつきりしたものじゃな
い。言っただろ、この話は創作だって。見
たような気がしたというのは、わたしがそ
のとき、この黒部湖の湖底には、東西南北
の方角軸に沿って、もしかしたら、四つの
人柱が捧げられたのかも知れないと考えた
からなんだ。ありそうな話だと、きみは思
わないか？」

「ほんとうに三十数年前に人柱が捧げられ
た。そう考えるほうが、今夜の小矢部さん
との話は面白くなりますよ」

吾平は話に引き入れるのがうまかった。
この術で森中記者も片膝乗り出すことにな
ったのだらう。仲条とて同じ立場に置か
れていた。

「あくまで話さ。わたしの頭の中に思い浮
かんだ。その気で聞いてもらわないと、ま
た、噂が噂を呼ぶことになる」

酒のせいかな、吾平の喋り口は滑らかな
った。

「四つの人柱と考えるには何か、根拠のよ

うなものがあるのですか？」

「はは、新聞記者口調だな。今夜はわたしの創り出した怪談を聞く気にならなければだめだよ」なお、吾平は楽しんでいるふうである。盃の酒をぐいと飲み干すと、酌をしようとした仲条を制し、吾平はコップを台所から持って来て、どぼどぼと徳利の酒を空けた。あとはコップ酒で吾平はピッチを上げた。

「わたしの話の源を一つ披瀝（ひれき）しておこうか。これは実説として伝わっている話だが、日本の城造りに当たっては、いろいろな妖異伝説があつてね。得意ぶつてあれこれ話をするのは止めるが、いちばん、わたしの心に染みている話に、城の普請に下級武士が自ら申し出、城を守るために人柱になるというのがあつた」

「実説人柱伝説ですか？」

「たぶん、実際にあつた話だろうな。戦国時代なら禄の少ない下級武士も武勲を立てることができたらうが、争いの少ない時代にはそうはいかない。それで城を支える四本の支柱、つまり、方角は東西南北でことになるのだが、四人の下級武士の長が、子孫のために禄高を上げてもらう目的で、支柱を打ち込む場所に人柱として埋められることを望んだ」

「伝聞としてではなく、その事実を実証されているのですか？」

「古い城郭の支柱のあつたと思われる場所では何例も、人柱となつたと想定され

る者の人骨が発見されている」

吾平は一息継ぎ、コップ酒を口にする。

山菜料理に仲条は手をつけていたが、しばし、その手を休めた。

ぐつぐつと煮え立つ鉄鍋のたぎりの音を、仲条は聞いていた。

「無惨な死さ。人の死だから酒を飲みながらでも話ができるが、太い柱が打ち込まれたあとには、粉碎された人骨だけが残っていた。覚悟の死とは言えるが、いつの世も、暮らしに恵まれない者は悲惨な目に遇う」

吾平の視線がちよつと宙を泳いだ。

「きみはもちろん、この山小屋の初代の主、岩垂（いわだれ）六助さんのことは知っているよな」

「ええ、そのへんの話も森中先輩から聞かされています」

仲条は神妙に答えた。

岩垂六助は、元は修験僧の一人で、山の中に入り修行したという。山岳密教の系譜を引く者だったということだったが、仲条はそれほど詳しくは知らない。

それより、黒四ダム完成後一年目の春のある日、岩垂六助は黒四ダムで入水（じゅすい）自殺した話のほうが人々の間ではよく知られていた。

覚悟の自殺で、森中から聞かされている話では、自分の寿命を岩垂六助は悟り、書き置きを残して 死んだという。

「わたしがこの山小屋に住みついたのは、黒部ダム完成後のことだ。この山小屋

の先代の主、岩垂六助さんはたしかに昔、山で修行したようだが晩年は溪流釣りの名人として鳴らした。弥堂平（みどうだいら）のほうの虚臓窟（こぞうくつ）という岩穴でひとり住んでいたが、黒四ダム開発で、あたりがにわか騒々しくなつて、結局は里地の者と交わるようになった。どういうわけか、わたしとは気が合つてね。わたしは二十になつた年から三年、黒部ダム建設工事に工夫（こうふ）として加わつたんだが、ダムの完成後、六助爺さんと二人、この場所に小屋を建てて住むようになった」

吾平は六助との関係を語ってくれた。

「元々、わたしは山好きだったから、ここを拠点に、北アルプスの山々を踏破できると考えたのがことの始まりさ」

「それじゃ、立山連峰をはじめ、北アルプスの山は、小矢部さんは、すべて踏破なさつたわけですか？」

「それがそうでもない。六助爺さんが翌年に入水自殺した、きみも知っていると思うが」

「ええ、森中さんから聞いてはいますが」

「それで、番人がいなくなり、あとは山小屋の番人暮らしがほとんどさ。ま、この近辺の山なら庄川くんの撮影に何回か同行したことはあるが」

酒の量は過ごしていたが、吾平は乱れを見せなかつた。仲条はもう一つだけ聞いてみたいことがあつた。日報新聞で今

度、『立山いまむかし』という連載ものの企画が、すすんでおおり、そのことで吾平に協力を仰ぎたいむきがあったのだ。

この企画のことを先輩の森中に相談したら、耳寄りな情報を入れてくれたのである。

「あの、岩垂六助さんは、これまで修行されたこととか、立山の動植物史、天候についての記録とか言ったものを何冊かのノートにしたためておられたと聞いたのですが、そのノートはいまも、小矢部さんの手元にあるのでしょうか？」

「うん？あのノートのことか」
気を許していたふうに見えた吾平なのに、急に用心深い顔になった。

それで、仲条はノートが入用なわけを手短かに吾平に伝えた。

「『千の平雑感』のタイトルがたしかついていたな」

「と言うと、いまは？」

「ここにはない」

「誰かの手に、渡ったということですか？」

「四冊あったが、どういうのか、一冊だけ欠けていた。残りの三冊は、初め六助爺さんの入水自殺のことがあって、警察が参考までに調べた。そのあとは、貴重な記録だというので、富山の図書館員のうーん、何と言ったかな。そうそう、山崎とか言ったな。郷土史家の人に、たしか預けられたはずだ」

「富山図書館の山崎さんですか？」

仲条の質問が急だったので、吾平は一呼吸入れ、酒に口をつけた。「欠けていた一冊ですが、どこへ行ったのか小矢部さんの心当たりはないのですか？」

仲条は追求口調で吾平に質問を浴びせていた。

「四冊あったのは覚えている。それが、六助爺さんがああいうことになる前になくなったのか、その後のことであつたか、一騒ぎあつたものだからよくは覚えていない」

「あの、小矢部さんは、その欠けているノートについては眼を通されたことがあるのでしようか？」

「ない、ないよ。他のノートも、参考資料として警察に渡る前にぺらぺらとページを繰っただけだ。その程度のことです、頭には何も残っていない」

「それじゃ、その山崎さんて方に、わたしのほうで接触してみます」

仲条は取材手帳をとり出し、吾平が口にしたことをメモした。

「何かの役に立てばいいが、ああ、そうそう、二、三年前だったかな、その山崎某の息子と名乗る人が、家族連れでこの山小屋に来てね。父親が千の平小屋のことを、よく懐かしそうに話をしていたと、聞かされた覚えがあるよ」

「わかりました。いろいろと参考になることを聞かせていただいて」

「なくなつたノートだが、わたしは眼を通したわけじゃないが、その、人柱伝説

の創作話、前に六助爺さんに聞かされたことがあってね。完全なわたしの創作話じゃない。もしかしたら、その紛失ノートには、六助爺さんの知っている怪しげな儀式のことも書いてあったかも知れないな」

「怪しげな話ですか？」

「自称仙人とも、天狗の生まれ変わりとも自分で吹聴していた奇人だった。修行僧の時代に、密儀のようなものも、いくつか身につけたということだ。ま、そのことと、わたしが話をした黒部人柱伝説とは関係のないことだが、六助爺さんとはかく、この世離れた人物だったってことはたしかだ」

吾平はそれ以上のことは言わなかったが、仲条は岩垂六助の人物像にこのとき、興味を抱いた。

この夜、吾平から聞かされた断片的な話の事柄がのちに、これから発生する事件の取材に役立つことになるのだが、まだ、仲条はその僥倖（ぎょうこう）には気づいていない。

「ぼくはさっきの、人柱の話に興味はつきません。下級武士が人柱になったという話もそうですが、小矢部さんが、満月の夜、黒部湖を前にしてイメージされた話、話を聞いているうちに、ほんとうに、そういうことってあったんじゃないかと思ってしまいました」

「ないほうがいいよ。まあ、そういうことより、日本の高度成長期を前に、難工

事に挑み、命を失った百七十一人の犠牲者がいるということ、わたしとしては忘れないでいて欲しいと思う気持ちのほうが強いの。そのため、わたしが見たような気がした四つの月の影、創作話だというのはネタが割れてしまったが、この話が伝わることで、慰霊の意味が込められるならと思ってね」

吾平の話に、仲条は頷いた。

「まあ、二人きりしかいないこの山小屋で、男同士、一献（いっこん）汲み交わす、この縁に乾杯といこうじゃないか」

吾平は仲条の杯になみなみと酒を充たした。 囲炉裡の火が、ぱちぱちと爆ぜた。 吾平の横顔に赤い火影が映じた。

3

立山黒部アルペンルートの特設開通を祝って、四月二十五日、標高二四五〇メートル地点の室堂ターミナルで雪の祭典が催された。

毎年の恒例の行事で、ローカル局ではその式典の様子が放映され、日報新聞富山支局の仲条も取材のために、室堂高原まで足を運んだ。

カメラマン同行というほどの大袈裟なことではないので、仲条は自らカメラを持参し、カメラマンの役もつとめた。

近くの室堂山荘に宿をとり、仲条は夜のスキーフェスティバルのほうにも付き合った。

こちらはカメラにおさまる話ではなかったが、全国のテレビ局からの放送向けに、松明（たいまつ）をかざしたスキーチームが、デモンストレーションの滑走をやった。サーチライトに照らし出された室堂高原の雪の斜面はまだ新雪をかぶったように、美しく映えた。

催事は午後七時には終わった。

仲条は顔見知りの他社の新聞記者と、酒を汲み交わし一夜を過ごした。

この日の夕刻のこと。中年と思われる男と女が一組、立山の峰々の一つである雄山（おやま）の頂きを目指した。

二人とも終始無言であった。

一台の車が雄山神社の駐車場内に乗り捨てられていた。二人が登ろうとしている道は、霊山立山への往時の登山道で、二人は初めに夕闇の迫った村の墓地に足を踏み入れた。

二人とも白い経帷巾（きょうかたびら）に身をやつしており、菅笠を頭にかぶり、日本手拭いで半分ほど顔をおおっていた。袈沙（けさ）、念珠に、手甲脚絆（てっこうきやはん）、白地下足袋、手には二人とも金剛杖を握っている。

杖は執金剛神（仁王様）の持つ金剛杵（きね）をかたどっており、上部は五輪（地水火風空）をあらわした護身用のものだった。

村の墓地の近くには小川が流れていた。もうあまり人の知るところではないが、二人が踏み込んだ場所のすぐ近くを流

れる小川には、布橋の名のついた朱塗りの橋が昔はかかり、近くには姥堂（うばどう）があつた。

いまは風土記の丘として観光用に整備され、橋も姥堂も別の場所に移されていたので、ここにはない。

これらの史跡は、明治政府の廃仏毀釈（はいぶつきしやく）の風潮の結果、移動されることになったものである。

立山信仰では、旧姥堂の在った場所までしか女人（にょにん）は登ることを許されなかつた。

その場所に男と女は立っていた。

夕暮れの墓地には人の姿はなかつた。

「われらこれより風魔雷神さまにお目どおり願ひする儀により、そなた、女性であることのお許しを得よ」

男のつく錫杖（しゃくじょう）の鈴の音が、地を撞（う）つと、ちりりと鳴つた。そのことばに、女は肩から下げた白い布製のズタ袋から一枚の神の符を恭々しく、取り出した。

短冊型の長さ七、八センチの紙札だつた。その神のお札には、

變女轉男（へんじよてんなん）

の、版木刷りの四文字が記されていた。旧漢字の書体のままで、版木自体は相当、年古りたものと考えられた。

女、変じて男となる―文字どおりの意味だとそのように解釈することが出来る

。女はそのお札を袈裟衣の襟の折り目の中に二つに折り、しまい込んだ。

「われらは今より一つ神になる。雄山に至り、交溝（まぐわい）の儀を行のうて、神のお許しを得ることにしようぞ」

二人の行者の姿を見た者がいたとしたら、夕闇漂う墓地にたたずむその異様さに、しばし、足をとめて様子を窺ったかも知れない。が、人影はなく、やがて、二人は姥堂川に沿って広い車道に出、雄山神社祈願殿に詣った。

境内には三メートルはあろうかという太い樹幹の老杉が、宵闇の空高くに伸びており、いっそうに、あたりを暗くしていた。

現在の雄山神社は立山頂上の峰の本社と、山麓の地にある芦峯寺（いわくらしじ）の祈願殿と、岩峯寺の前立社殿からなっている。

十世紀はじめに完成した『延喜式』御条々の中には『雄山神社』は新川郡七壁のうちのひとつとして記されている。

往古、神社の他に姥掌閻魔堂、講堂などを構えて立山仲宮寺とよばれ、神主、衆徒、社人たちを中心に一大集落を形成していた。男と女連れの二人は、老杉の道を踏み入り、さらに山中を目指した。

落葉の合い間道には、まだ、雪が残っていたりし、道のない道なので、二人は足を忍ばせるようにし、一歩一歩をすすめた。二人の姿を見送った者もなく、薄藍色の闇が、二人の影をすっぽりと包ん

だ。急な岩の道に出た。

この頃には、すっかり日は昏（く）れており、二人は懐中電灯の明かりを頼りに、およそ一時間の余も歩いた。

まわりはブナ林になっていたが、一本だけ、千年杉が暗い闇闇に立ち、時折、天上の風を一身に受けて、ひゅーと風鳴りの音を地上にとどけた。

太い樹幹には、荒縄で編まれた×縄が巻きついており、わずかに御弊（ごへい）の千切れた端くれが×縄には残されていた。

「雷神様の御堂、いま少しのことだ」

と男が肩で息を吐きながら言った。

女はただ荒い息だけを返した。

二人はまた歩き始めた。

急登の坂道を上がった地点に千年杉があり、その下はやや急な崖道となっていた。二人は手に手を取り、救い合いながら崖道を下った。

すでに川のせせらぎの音が聞こえていて、崖の下には水の流れがあることが知れた。

「川の音を聞くと、わたしのこれまでの不浄の生き方のすべてが洗われるように思えます」

女は途中、一呼吸ついたとき、神妙な声で男に告げた。

再び歩き始めた二人は、そのまま、崖を下り、河原の場所まで降り切った。

「この季節なのに、汗びっしょり」

「はは、心の中がもはや燃え立っている

のか。いや、お前の、その不浄の肉体がだ」

男は言い、また、女の手をとり、河原伝いに二十メートルほど歩いた。

小さな岩穴のあるあたりまで連れて行く。あたりの茂みにはまだところどころ雪が残っていた。白い闇が妖（あや）し気な空間をそこにつくっている。

「男でもない、女でもない、われらは双成（ふたなり）りの身になろうぞ」

「はい、もはや、わたしめの女なる部分が、男のものに成り変わろうと願っています」

「男のものにな。そして、わたしの男のものは、女のかたちになぞられて、女そのもののかたちに成り変わる」

二人の声は艶を帯びていた。男と女は川の瀬に歩をすすめると、お互いが身に着けていたものをすべて脱いだ。男がはじめに、川の瀬に裸の足を入れた。

「さあ」男は振り返り、女のほうに手を差し出した。

月は欠けていたが、それでも青白い月明かりが、闇に眼の慣れた者たちには、この世の光明とも見えた。

男と女の裸形が、川底の小石を踏みしめて水の深みへと身を沈めて行く。

雪水だから、水は肌を切るように冷たい。足の先が切られ、その感覚は次第に全身に及んだ。

「おーっ、おっ！」

「あん！うんっ！」

二人は交互に気合いの叫びを上げた。背がやっと立つ場所まですすんだとき、二人の裸形は一つになった。その頃には肌に切り込んだ痛覚は薄れ、体の内にある体温がお互いの体に伝わるようになっていた。

二人の身を浄める儀式は終わった。

男は女を両腕に抱えとると、川から上がり、そのまま、崖に穿たれた岩穴まで、ゆっくりとした足取りで歩み、そして、一メートル余の高さの岩穴を背をかかめるようにくぐった。

入口のあたりは女陰の門を思わせる縦の割れ目が入った岩肌で、この岩穴を知る者以外には、その奥に洞窟があることは知りようがない。

中は真暗闇だったが、男は前に来たところがあるのか、探り足ではあったが、低い天井に頭をぶつけることなく進んだ。五、六十歩も入ると、奥は広くなっており、五、六枚が敷き詰められるほどの岩穴になっていた。

その岩穴の突き当たりの壁に、一体の人物像が彫り込まれていた。

もちろん、真暗闇のことだから、その御姿を拝することはできない。

が、二人とも前にろうそくの灯をともし、岸壁に刻まれたご神体を拝したことがあるのでその御姿は頭の中にあつた。

風魔雷神さまと彼らが呼んだご神体は世に伝わる雲に乗った雷神像とおよそ趣を異にしていた。一匹の龍蛇が、岩の

壁には刻みつけられており、いまにも天を翔けそうに、全身を躍らせていた。

両眼はかっと見開き、口からは炎が発せられていたので、なお、龍蛇は怖ろしげに見えた。

岩の壁には、東西南北の方角に、四羽の雷鳥が配されていた。さながらに、神の使徒を思わせた。

ずんぐりしたかたちの四羽の雷鳥は、光を通さない闇なかなので、その姿はいまは黒く染められていた。

それらの黒い雷鳥は、風魔雷神さまを守るように、まわりの壁に刻みつけられている。男と女は裸のまま、平らになった岩床の上に両の膝をつけた。

女の高くかかげた腰のうしろに男がまわった。男は手を伸ばし、女の股間に隠されたものを探った。肉の襞は冷たく縮かんだままで、ごわごわしていた。

男の一物も冷えきったままだった。が、男の手指は執拗に、肉割れのかたちをまさぐり、おのれの手の暖かさを直かに伝えた。

「はふー、ふわー」

女が腰をよじり始めたとき、男の指に粘液のぬるみが塗りつけられてきた。

闇の中のことなので、男には余計のこと、そのぬるみの生じ立ってきた感じとか、肉の飾りのかたちの変化などがよくわかった。濡れの粘液をすくいとり、男の手指は、女のいちばん敏感な部位を責め立てにかかった。

いつの間にか、剥き立てられた女の肉粒（にくりゆう）は、肥大し、こりこりしてきた。

その頃から、女の喘ぎの声はいっそうに昂（たか）まり、腰の揺れも複雑になった。男は頃合いを見、女の肉割れにこのれのを当てがった。

「双つ神になるぞ。もはやお前は女性ではない。男とつながれた一つ身だ」

男は神がかった文句を口にした。

「あーうん……」

女は結合の歓びの声を上げただけだった。男の荒い息と、女の昂まりの波を知らせる喘ぎ、そして、肉と肉がこすれ、ぶつかる卑狼な音が、小さな岩室の中にはね返り、こもった。

人間の男と女の営みの様を、岩に刻まれた風魔雷神像が慈宇（じう）の眼差しで見凝（つ）めていた。

その眼は何か光を帯びたようだったが、行為に夢中になっている二人は、何の気配も感じとることはなかった。

男のものは男のものではなくなり、女のもものは女のものではなくなっていた。一つに埋め込まれた肉のかたちは、それ自身が溶け合い、一つの別の器官の感覚をそこに生じ立たせていた。

庄川征雄の遺体発見の第一報を受けた。

富山、長野方面から、このゴールデンウィーク、およそ七万人ほどの観光客が黒部ダムを訪れた。その取材も終わってやっと一息、二、三日は休みを取ろう考えた矢先の事件発生だった。

富山から車を走らせ、立山、弥陀ヶ原経由で遺体発見の場所、室堂平に彼はカメラマンを同行、車を走らせた。

四月上旬に行方を絶った庄川征雄は殺されていた？

警察は殺人事件とすでに断定を下していた。仲条は逸る心を胸に現場に直行した。

捜査のための仮本部も、室堂警備派出所内にすでに設けられており、初動捜査が開始されていた。

室堂警備派出所は観光シーズンだけ開設される交番で、他に黒部ダム施設内にも、上市（かみいち）署黒部ダム警備所が設置されている。

殺人事件発生の第一報は、黒部ダム警備所の署員から管轄の上市署にもたらされ、報道機関が動く前に、上市署から捜査員が出向き、仮本部が設置された模様だった。

室堂平は富山から黒部湖に至る途中にあり、通常、千寿ヶ原でマイカーの乗り入れは禁止されているが、報道機関の特例で、そのまま、室堂平に車は乗り入れることができた。

室堂平は標高二四五〇メートルの高地

で、立山連峰の一角に位置する。

一点に立つと、立山連峰の浄土山、雄山、大汝（おおんじ）山、真砂岳（まさごだけ）、別山（べつざん）と三〇〇メートルクラスの山々を眼上遙かに望むことができた。

白雪を頂いた山々は、春の陽光を浴びて、銀色に輝いて見えた。また、室堂平はホテルや山荘、また、診療所などもあり、観光客や、立山、剣岳（つるぎだけ）方面への登山者の基地として、夏などは賑わいを見せる。

仲条は室堂警備派出所に同道したカメラマンと共に顔を出した。報道機関の中では彼らはいちばん乗りだったので、二人とも大いに張り切っていた。

報道機関用に手回しよくテントも用意されていた。仲条は顔見知りの上市署赤根一義刑事を見つけ近寄った。

赤根は三十四歳のベテラン刑事で、日報新聞富山支局の前任者、森中記者とは特に親交があった。

左腕を包帯で吊っている姿が少し痛々しい。十日ほど前、赤根は勤務中、信号無視の酒酔い運転車に、車の横っ腹に突っ込まれ、左上腕骨にひびの入る怪我を負った身だった。

「みなさんの接待係を今回はおおせつかったよ。片手でお茶を淹れろとはね。それでみなさんにはご自分でどうぞということにしている。ご到着の二人はお茶など召し上がるかね」

いかつい顔をしているが赤根は根はやさしいところがある。

「一課長以下、みなさん、お揃いですか？」と仲条がたずねた。

警備派出所横の空地に設営されたテント内には他社の記者の姿はまだ見えない。

「一応、現場検証に部長刑長以下総勢五名、鑑識の連中も入れて七名かな、おれをこの留守番役にしてお出掛けになったよ。二時間前のことだ」

「他の社がすでに現場のほうに？」

「日報さんがいちばんだよ。この秘境の山ん中、走って駆けつけるわけにはいかんからな」

「それじゃ、わたしは、現場に直行させてもらいます」

室堂平の山荘裏手にある玉殿の岩屋で、庄川征雄らしき者の遺体が発見されたと知らせてくれたのは、赤根刑事自身だった。

仲条とカメラマンは山小屋の室堂山荘を目標に車を走らせた。バス停のある場所から三分ほど、車一台分が通れるぐらいの砂利道がついていた。

車は室堂山荘までで、その先は通行不能だった。立番の警察関係者がいて、彼らは一応、身分を質された。

仲条らは、歩いて三、四分の死体発見現場とされる玉殿の岩屋に向かった。

道の行き止まりの崖上に立つと、すぐ近くの眼下に、すでに警察関係者の姿があった。崖上にも見張りの警察官がいて、「これから先は立入り禁だよ」と彼ら

に告げた。すでにカメラマンは、崖の中腹にある玉殿の岩屋に望遠レンズを向け、数枚の写真を撮っていた。

「仏さんはまだ現場に？」

仲条は張り番の者に訊いた。

「さあ」

としか警官は答えなかった。

仰々しくロープの張りめぐらされている玉殿の岩屋の入口あたりにたむろしていた捜査官たちは、見張りの者を残し、崖道を伝って仲条らが立っている場所にもどって来た。

仲条の見たところ、庄川征雄の遺体はすでに現場にはないようだった。

引き揚げて来た捜査員は五名だったの
で、鑑識課員はすでに、現場にはいない
模様だった。

遺体はこの山から下ろされていること
が、仲条にも予測がついた。

日報新聞としては一番乗りを果たした
が、得るところは少なかった。

一時間余遅れて、他社の連中も顔を揃
えた。上市署の捜査一課長が、型通りの
記者会見をした。仮設テントの中にはま
だ冷たい風が吹き入った。

「第一通報者は室堂山荘宿泊者の二名の
若い女性で、五月五日、午前八時三十七
分、玉殿の岩屋に写真撮影のため入った
ところ、洞窟奥の空所に膝を折り曲げ、
かがみ込んでいる姿勢の被害者、庄川征
雄を発見、通報により室堂山荘の経営者
樋口市郎さんが、上市署黒部ダム警備所

に遺体らしきものがあることを伝えて来たので、直ちに黒部ダム警備の警官が現場に直行、現場保存を行った。上市署より捜査員が出向き、調べたところ、所持品、装具などによって、被害者は山岳写真家の庄川征雄、五十三歳と断定した。なお、殺害方法については、現時点では特定されておりません。こちらは解剖所見を見るまでは、発表の段階にありません」

捜査一課長はコメントを棒読みしたあと、すぐに、席を立とうとした。

「遺体発見現場と殺害現場は一致するかどうか、そのへんのところをお聞かせ下さい」

仲条が喰い下がった。

山岳写真家庄川征雄が、黒部湖畔周辺の残雪の山々の撮影行のため入山したのが四月十日、行方不明の捜索が開始されたのが四月十七日、三日間の捜索にかかわらず発見されなかったのに、とつぜん、空間移動でもさせられたように死体が見えられ出た？玉殿の岩屋は前回捜索時には、救助隊員が岩穴であることから捜索はしていた。

この不自然さには誰だって疑念を持つ。「現在のところ、特定するに足る捜査資料は持ち合わせておりません」

このゴールデンウィーク、すでに山開きもされ室堂山荘にも宿泊客は大勢いた。

「五月五日の朝、午前八時三十七分に第一の通報があったということですが、玉

殿の岩屋にそれ以前に出入りした者がいたはずですが、そちらの捜査はどうなっていますか？」

仲条はまた腰を半ば浮かしかけた捜査一課長に、矢継ぎ早に質問をあびせた。

「本日が五月六日で遺体発見が五月五日、われわれ報道者にすぐに事件発生のお知らせが入っていませんが、特別の事情でもあり、今度の事件は、何か緘口令（かんこうれい）でも敷かれているんですかね」

ライバル紙のベテラン記者が捜査一課長がすぐに席を立たぬよう楔（くさび）を打ち込んだ。

「この山の中の事件だ。特別の事情はないが、そのへんは、理解してもらいたい」

「遺体発見以前にたぶん何人もの者が、玉殿の岩屋に観光見物に行っているはずです。五月四日には遺体はなかったということでしょう？」

仲条がさらにことばを重ねた。

「室堂山荘の宿泊者名簿を中心に、そういう者がいるかどうか、現在、その方面の捜査は続けている。本日までのところ、発表できる事柄は以上だ」

今度は、他の記者からも質問が飛んだが、捜査一課長は、みんなを押し切り会見場をあとにした。

「死因は凍死ということも考えられますか？」

「なぜ今頃、庄川征雄の遺体が発見され

たんですかね？」

「意図的に玉殿の岩屋に死体は遺棄された。そういう可能性はありませんか？」

記者たちの喧騒な声が湧き上がった。

どの質問にも、庄川征雄殺人事件の謎の部分を探ろうとする記者たちの嗅覚が、鋭く働いていた。

仲条も同じ思いを抱いていた。

行方不明の間、庄川征雄の死体は冷凍体にでもされて、山中に隠されていた？

仲条は唐突な死体発見の状況から、そんな大胆な推理を働かせてさえいた。

5

捜査本部は上市署におかれた。

上市は、人口三万ほどの小さな街だが、街の歴史は古い。

昔、立山の山岳信仰が盛んであった頃には、その街道筋として開け、いまも、巨岩に刻まれた不動明王や六本滝のある大岩白石寺、トガ並木の下をくぐっての参道が参詣者に安らぎの気持ちを用意してくれる眼月（さっか）の立山寺（りゅうせんじ）など、古い史跡もいまに残されている。

街の東南方角には剣岳の高峰も望めた。その四季様々の山容に街の人々は、折りに触れ、畏敬の念を抱いてきた。

しかし、神の山の地で起きた殺人事件は、庄川征雄が山岳写真家として日本でも有数のカメラマンだったので、中央

紙も大きく紙面を割き報道したので、各社の取材合戦も熾烈なものになっていた。街の八十パーセントが森林地帯という静かなところなのに、殺人事件の捜査本部が設けられたばかりに、ぐっと車の行き来も増えた。

五月八日、仲条記者と赤根刑事は他社の記者に気付かれぬように千石森林公園内のレストラン内で会った。

市街地から外れた地なので、人の眼からのがれるには絶好の地だった。

「特別のネタを提供するよ」

と仲条は赤根刑事に電話口で囁かれたので、勇躍、富山から車を飛ばし、約束の時間よりも十分早く、約束の場所に到着してしまった。

曲がりくねった山間の道の途中に上市川ダムがあり、小用を足すために仲条は一度だけ車を降りた。

日本で唯一の海を眺望することのできるダムとして上市川ダムは知られていたので、ついでに、遙かに見える富山湾の陽光に白く照り返った海を眼にした。

千石森林公園のあるあたりは上市川第二ダムがあり、ここでも水の清さと、五月の樹々の緑が眼に染みた。

定刻に赤根刑事は車でやって来た。

「やあー、お待ち兼ねって顔だな。まあ、摩訶不思議（まなふしぎ）な話をしているから、気持ちを落ち着けて聞いてくれ」

向かいの席に坐るなり赤根は、気を持

たせるようなことを言った。

「煙草ぐらいサービスしますよ。その手じゃちよつと」

ヘビースモーカーの赤根がいまいちばん不自由しているのは煙草の火を自分ではつけにくいということだった。

「それが、窮すれば何とかだよ。見てろつて」

そう言うつと赤根は右手をジャンパーのポケットに突っ込み、煙草の箱を取り出すと、ひょいと上下に振り、飛び出した吸口を、素早く口にくわえた。

ライターを取り出した仲条の手を押し止どめる。自分のライターで赤根は火をつけた。ふーと一服、うまそうに喫う。

「第一線に出られないとは残念な話だ。それで今回は記者さん相手におれは、推理劇を楽しむことにした」

「それが、摩訶不思議な話ってわけですか？」

「さて、何から話をするか」

「そうもつたいぶらないで、赤根さん、ズバリとお願いします」

「よし、殺人事件と断定されたのは仏さんにご対面したその一瞬からのことだった」

「何か外傷でも見つかったのですか？」

「いいか、そんな、ありきたりの話じゃないんだ。庄川征雄は首なし死体で発見されたんだ」

「首なし死体？」

コーヒーカップを手にしたまま、仲条

は赤根の顔を見返した。

「そうだ。一目瞭然、兇器は何と鋸（のこぎり）のようなものらしい。首は挽（ひ）き切られており、その首は発見されていない」

「何者が何のために、そんなことを？」

「摩訶不思議というのは首だけのことじゃないぞ。首の切断口にはおまじないの仕掛けがあった」

「おまじないですか？」

仲条はメモ帳片手に膝を乗り出した。

「まあ、よく聞け。きみは、魔除け札には詳しいほうか？」

「魔除け札と言ってもいろいろありますから。家内安全祈願に交通安全祈願、厄除けのお祓いの札とか……」

「首の切断口に、黒い雷鳥の魔除け札が一枚張りつけられていた」

「黒い雷鳥？立山の霊鳥である雷鳥が用いられていたってわけですか？そうだ、家の門にもそう言えば、かつては、立山雷鳥の護符がどこかに貼られていたような気がします」

「それぐらいのことならわたしでも知っているよ。山に登る連中の間では立山和光八権現の立山雷鳥のお守り札は、雷除けの霊験あらたかということ、わたしなども登山シーズン、仲間たちと、体力をつけるために山に登るときは、二羽の雷鳥と白雲を配した絵柄のお守り札を、ちゃんと身につけているぐらいだからな。夏の雷は怖い。ところが……」

そこで、赤根刑事は顔をくもらせた。

「黒い雷鳥には何か特別の文字でも書き込まれていた？呪いの文字か何か？」

「いや黒い雷鳥は黒い雷鳥さ。木版を押しつけたものらしいが、何のまじないか四羽の黒い雷鳥が配されているんだ、これが」

「四羽？四という数に何か特別の意味でもあるのでしょうか？」

「あるか？ないか？わたしは後方部隊で切歯扼腕（せっしやくわん）している身だから犯人に直接は迫ることができない。

同僚の悪口室言うのも何だが、常識にかからないこの手の犯罪には警察はどちらかというと弱い。そこで新聞社のネットワークをフルに使って、黒い雷鳥のおまじない札について調べて欲しいんだ。片腕もがれている身だからな。ここは一つ、おれとしては頭を絞って点を稼ぎたい」

「わかりました。ご協力を約束します」

「もう一つ、この特ダネだが、おれとあなたの二人だけの秘密にしておいてくれ」

「それじゃ、特ダネになりませんよ。そういうのは困りますよ」

「慌てる乞食は貰いが少ないって言うだろ。ベテラン記者と言うのは種を播いて、そのあとの刈り取りで大きな収穫を得るものさ。実は、黒部の山々に詳しい千の平小屋の小矢部吾平に、魔符の謎解きを頼もうと思ったんだが、本部のほうでは、小矢部吾平も容疑者の一人と考えていることから、変にわたしのほうからは

接触しにくい事情がある。お互い、顔見知りの仲だが」

赤根刑事が口に出すまでもなく、仲条も小矢部吾平が容疑者としての眼を向けられる状況にあることにすぐに頭がいった。庄川征雄は四月十、十一日の両日、千の平小屋に宿泊、その後、入山し、消息を絶っていたのだ。

小矢部吾平が、もっとも疑わしい人物であることにはちがいがなかった。

「単純明快に言うのと、どうも死体は移動させられたようだな。春と言ったって、まだまだ雪はたっぷり残っている。庄川征雄は何者かに殺され、雪の中か、氷穴で冷凍死体にされたあと、鋸で首を切断された」

「遺留品は？」

「冬山装備のままだが、商売道具のカメラだけは岩穴にはなかった」

「カメラだけないとすると、やはり、殺害場所は別の場所？」

「死体移動説が有力だな。死体発見場所には首が切断されているのに血の跡はない。その首の切断口に、黒い雷鳥のおまじない札が付着していた」

「捜査本部はそこのおまじない札についてはどう考えているのでしょうか？」

「きのうのきょうだ。結論は出せんよ。単なるいたずら説もあるが、物的証拠の一つにはちがいない」

「当然、調べるのでしょよね。警察のほうも」

「富山大学の偉い先生に、黒い雷鳥のお札については調べさせるようだ。いいか、日報新聞が早い か、大学教授が早い か、ここは一つ気張ってくれ。はぐれ刑事の楽しみまで大学の先生に先取りされたんじゃないよ」

「はい、わかりました。赤根さんのご期待に添えるように心当たりの筋を当たってみますよ」

二人は頷き合った。

「おい、特ダネは取り消しだからな。赤根一義と 仲条立彦、犯人を挙げるために特別に手を結んだ。おれのこととははぐれ者と当分の間は考えてくれ。おいしい話だけして、捜査に協力させるとはおれも人が悪いが、いまは、片腕もがれている身、つつい、相棒が欲しくなったってわけだ」

「わかりました。明日の朝刊にでも、首なし死体で発見か？」と見出しを打ちたいところですが、ひとまずがまんします。黒い雷鳥の護符が意味するもの、それを探れば、記事はもっと面白くなりますよ」

仲条は推理小説でも、ものにするつもりで心を躍らせた。

庄川征雄が山開き前に、入山したその時期と限定すると、山に入っている人々は少ないように思えるが、除雪関係者や、黒部峡谷鉄道の補修班も含め、少なくとも百人前後の者は、山開きの準備のため山に入っていた。

黒部峡谷鉄道は運転期間の終わった十二月に、全長二十キロメートルのうち、トンネル部分を除き、約八キロメートルのレール、電柱、電線は、雪崩に備え全部外されるので、その後、復旧作業は三月から四月にかけて大掛かりなものとなった。

また、遺体発見現場の玉殿の岩屋のある室堂高原からバスで十五分ほどの弥陀ヶ原は、春スキーが本格化したばかりで、四月開始を待ちかねて、スキー客が大勢押しかけていた。

美女平から室堂ターミナルまではバスも運行されている。犯人像を追えば、無数の者たちが、特に富山側からのルートだと入山していることになるのだった。

赤根刑事と別れたあと、仲条記者はひらめくものがあり、富山市内にある図書館に直行する気になった。

一つは図書館の資料の中に、護符を研究した書物があるかどうか、また、黒い雷鳥の連想から山岳仏教に係のある立山信仰に関する書物にも眼を通してみるつもりだった。

もう一つある。

小矢部吾平から聞いた元富山図書館勤務の郷土史家山崎某の息子が住む先も、ついでにたしかめておきたかった。

紛失したノートに、仲条は何か意味があるのではないかと、別の視点も、このとき、持っていたのである。

山崎家は富山市梅沢町にあった。ノートを預かったのは故人の山崎誠一郎で、息子の名は昭司と言った。

父祖代々の家は一部、普請されたふうもあつたが、旧家の造りは門構えや、さわら垣、それに支柱の太い柱など随所に見られた。土蔵があるのも、代々続いた家らしい趣があつた。

いまは当主の昭司は、薬品会社の研究開発室に勤めていて、昼間は家にいなかった。仲条は夜まで待つことにしたが、その間、内幸町にある杜にもどり、原稿の整理をし、庄川征雄殺人事件の続報をデスクに渡した。

赤根刑事から仕入れた情報はそのまま記事にしたいところだが、仲条は逸る気持ちを押えた。

玉殿の岩屋という立山信仰に由縁の岩穴に放置された状態で遺体が発見されているだけに、特異な事件としての側面もあると、捜査当局は見ているふしもある。と仲条記者は結びの文につけ加え、それとなく事件の背景にあるものを匂わせるに止どめた。

山岳写真家、庄川征雄の遺体発見、殺人事件は、仲条を通して東京本社 of 森中記者にも伝えられた。山岳雑誌や、旅のガイドブックなどでも、北アルプス山系の山々の写真は庄川征雄の場合、数々、紹介されており、著名人でもあつたので

、殺人事件のニュースは、全国版でも報道された。

この記事のほうは森中が担当した。

特ダネの首なし死体と、首の切断口に貼りつけられていた黒い雷鳥の護符らしきものの存在については、仲条は森中にも伝えた。

山男の森中は赤根刑事と同じように、雷鳥の護符は、雷除けのお守りだと、仲条に説明をしたが、黒い雷鳥の護符の存在については知らないと言った。

「凄いネタをお前はキャッチしているな。おれはいまからでも再度、富山支局に転任したいぐらいだよ。他に事件も抱えていて、そうもならんが、まじない札に詳しい者を見つけて、お前のアシストぐらいはしてやるさ」

と、森中は仲条に心強いエールを送ってくれた。

夜の七時半、仲条は山崎家を訪れた。応接室に通された。

当主の昭司は一人息子と聞いていたので、父親の誠一郎のことはすべて承知のはずだった。

応接室に現れた昭司は、背のひよろりとした、少し顔色の悪い男だった。

新薬の研究開発室に籍をおいている研究者らしく、神経質そうに仲条には見えなかった。細面で指も長く、猫背、いかにも研究者タイプといった印象だった。

そのせいか、初めはとっつきが悪かった。

「お疲れのところを申し訳ありません」

と初めに仲条は頭を下げた。

「日報新聞の記者の方とお聞きしたものですから、何事かと、いまも身構えているところです」

昭司は四十近い齢だった。細い銀縁の眼鏡を掛けていて、そのせいか、気の弱い性格のように仲条には思えた。これは仲条の勝手な推測というやつである。

「お父さんの誠一郎さんがご健在のときに、黒部湖の千の平小屋の小矢部吾平さんとご親交があったと聞いたものですから」

「ええ、小さいときに、わたしも父に連れられ何度か千の平小屋に行きましたし、今年の夏は家族連れて訪ね、小矢部さんともお会いしましたよ」

昭司の口吻（くちぶり）りが、やっと滑らかになった。

「誠一郎さんは図書館勤めで、郷土史家、何冊か、立山信仰の歴史とか文化について書物を残しておられますが、まだ、未整理のものもあるのではないかと思ひまして、お訪ねしました」

「と言いますと」

「千の平小屋を開かれた岩垂六助さんが、大学ノートに、生活雑感というか、立山・黒部に関する色々なことを大学ノートに記しておられ、そのノートをお父さんの誠一郎さんが預かっておられたという話を、小矢部さんからお聞きしたものですから、もしあれば、見せていただけ

ないかと思ひまして」

「ああ、あの大学ノートですか。見たよ
うな気はしますが、父の書齋、ほとんど
そのままになってはいますが、未整理の
物も多くて、さあ、どこにありますか」
「勝手なお願ひですが、新聞記者稼業、
これで結構忙しくて申し訳ありませんが
、書齋のほう調べていただけないでしょ
うか」

押しの一歩、仲条は昭司に、無理押し
をした。

「何かお役に立つことができるなら。ち
よっと待って下さい。お預かりしている
物の中に、貴重な資料が含まれているこ
とだってありますしね」

昭司は応接室を出て行った。

亡父の写真が額に入れて飾られていた
。山にも登り、自然を愛し、郷土史に興
味を持った人物らしく、別の額には、何
人かのグループと折々に撮った思い出の
写真が五、六枚一緒に入れられ、掲げら
れている。

故人の過去を探る気はないが、仲条は
ついつい新聞記者根性が出、誠一郎の交
友関係を知ろうとして、一枚、一枚の写
真に目を通した。

誠一郎はいま生きていれば八十歳を越
す齡である。写真の中には黒部ダム完成
を祝って、黒部湖や、完成した湖畔の建
物などを背景に、工事関係者らと一緒に
梓の中におさまっているものもあった。

古い写真だから少し黄ばんでいたが、

中央の場所に陣取り、鳥打帽をかぶっている人物に、仲条は何となく見覚えがあった。

二十七歳の仲条が、昭和三十八年六月の黒部ダム竣工を祝った写真の人物たちに知己のあるはずはなかった。

鳥打帽の男は壮年だから、生きていれば、亡くなった誠一郎とほぼ似た年齢、すでに故人になっっているかも知れない。

「そうか、あの有名な室堂建設の現会長、長門蓮作の若い頃の写真か」

と、仲条はひとり呟いた。

私の強そうな張った顎に、どんぐり眼（まなこ）の異相だったので、大抵の者は長門蓮作の顔は一度見たら忘れられないはずだった。

昔風にいうと、六尺豊かな大男、全員が立ち姿だったので、一人、長門蓮作はみんなより抜きん出ていた。

昭司が応接室に戻って来た。

茶封筒を小脇に抱えていた。

「千の平雑感」のタイトルが付されていますが、このノートのことでしょうか

「
」 応接室のテーブルの上に昭司は茶封筒を置き、大学ノートを取り出した。

「千の平雑感」ですか。山に生きた岩垂六助さんらしいタイトルですね。何でも、人の話によると、元修験僧で、その生き様は仙人のようだったとも言いますからね」

仲条は三冊の大学ノートをテーブルの

上に並べた。表紙に墨書（ぼくしよ）で番号が打ってあるのを、初めに目にした。それで、番号順に並べたのだが、一から四までの番号の内、三の番号のノートが欠けていた。

「何でしょう。四つの番号まであるわけですから、三の番号が打たれたノートもあるということになりますよね」

「はあ？一冊足りませんか？茶封筒の趣味については、父以外はさわった者はありませんから、わたしにはどうも」

昭司はほんとうに何も知らないようだった。化学の勉強をして、薬学を志したのだろうから、父親の誠一郎とは考え方も、趣味も違うのだろう。図書館勤務で、郷土史家、几帳面な性格だけは似ているのかも知れなかったが――

「千の平小屋の小矢部さんなら、この間の事情はご存知かも。わたしのほうでノート『三』のノートは探してみますよ。この三冊のノート、お借りしてもいいでしょうか」

「結構ですが、何のために必要なんですか」

「日報新聞で、立山・黒部山岳史の特集を組む企画がありました、千の平小屋の成り立ちや、暮らし向き、自然環境の変化なども、このノートがあれば正確に読者に伝えることができるものですから」

「家に眠らせておくだけじゃ、もったいないですよ。少し、郷土史なんかに、わたしも興味があればいいんですが、わ

たしは化学記号だけを仕事で追いかけていて、ちよつと」

昭司は言い訳めいたことを口にした。「ともかくお借りします。ああ、それから、他の者には、わたしがこのノート、借り出したことは黙っていて下さいね。企画が外にもれると都合が悪いもので」「そんなものですかね」

昭司は眼で笑い、同意してくれた。

仲条は預かった三冊のノートにじつくり眼をとおしたいので、この夜はビジネスホテルに泊まった。

独身なので、こんな場合は身が軽い。

ビジネスホテルの一室は寝るだけの施設だったが、壁際に申し訳程度のテーブルとスタンドが用意されていたので、仲条は早速、ノートをテーブルの上に広げた。

三冊のノートには、それぞれに、ノートが付されていた。『一』のノートの最初の日付けは、昭和二十八年で、いちばん最後の『四』のノートは昭和三十八年、つまり、欠落している『三』のノートも含め、十年間の『千の平雑感』が記されていたことになる。

『一』のノートから順を追って読み進めるべきだったが、仲条は欠落しているノンブル『三』のノートのことが気になり、『一』のノンブルの付されたノートのいちばん最後のページをはじめに繰った。

日記風に綴られていて、最後のペー

ジの日付けは昭和三十二年五月二日と
なっていた。横書きの大学ノートの罫
線（けいせん）に沿って、鉛筆書きで
小さな文字が並んでいた。

『神の怒りというが如何なものか。
破碎帯の湧水 事故によって三十四名の
尊い生命が奪われた。人類史上、初め
ての快拳に挑む黒四ダム建設の行手に
暗雲立ち籠め、山の神は黒い魔の手を
、この難 事業の前にかざした。さなが
らに神の雷鳥、雷（いかづち）と成り
て、山窟を穿つ吾等に鉄槌（てつつい
）を下せしものならん。黒い雷光の疾
（はし）りたる闇に、吾れは眼のみ雷
の如く光る黒い雷鳥のご神体を見たり
』この一文を読んだとき、仲条は身の
凍る思いをした。同時に、この文章の
続きを彼は読みたくなった。だが：こ
の続きは『三』の数字の示されたノー
トに書き継がれていることになる。

が、何かの手掛かりがあるかと考え
、仲条は、『四』のノンブルのついた
大学ノートの第一ページを開いた。

日付けは昭和三十三年元旦とあり、
その間に、約半年の空白期間があった
。紛失した大学ノートには、その間、
何が書き残されていたのか？

いや、不都合なことがあり、すでに
この世にはないのか？

仲条は見えぬ闇に眼を見据え、しば
し、文章の続きを読み取る気で頭を巡
らせた。

（黒い雷鳥の魔符？そして『二』のノートの最後に記された、黒い雷光の疾りたる闇に、吾れは眼のみ雷の如く光る雷鳥のご神体を見たり、の一節、まちがいになく、ここでは『黒い雷鳥』が重大な意味を持っている？）

そこまで仲条は頭の中を整理したが、それ以上のストーリーを追うことはできなかつた。

胸の衝撃がおさまるのを待ってから、彼は、次に『四』のノートの冒頭の文章を追った。

『山神・樹神の多くは僧、山伏などが死後、化（ばけ）れる者にして、天狗ともなり、また、鬼とも言いなされてきた。この老骨も死すれば天空を翔け、地鎮（じちん）の鬼となるのだろうか：』

仲条は、岩垂六助が、黒部ダム完成後の翌年四月二十一日に、薄氷の張る黒部ダムに、自ら身を投げ死んだことを思い起こした。

「この文章では、地鎮の鬼」という字句に彼は強い関心を抱いた。

もしかしたら岩垂六助は、黒部ダムの地の神に同化するために入水（じゆすい）自殺したのではないかと、仲条は勝手な解釈をした。

仲条は文を読みすすめたが、大部分は日記ふうの文章で、黒部ダム建設後の海外の視察団が大挙押しかけたとか、本格的な観光ルートの開発が見込まれ

ているといった話、また、立山黒部アルペンルートが今後、アルピニストたちに新しい登山ルートを提供することへの功罪論などが述べ立てられていた。いずれも、仲条が追っている庄川征雄殺人事件の本筋とはあまり関係のない事柄に思え、仲条は『四』のノートは斜め読みした。

が、秘境の山域を人間が侵すことへの怒りとか、科学万能時代にすすむこれからの世紀に向けての警鐘めいた私見が、全篇を通じて色濃く出ていた。

『四』のノートのページの最後は次のような文章で締めくくってあった。

「巨大なダムの堰堤（せきてい）はあくまで人工のもので、ここでは人間の叡知とか、科学の粋と言った名辞がこれからも人々の口の端にのるのだろう。恰（あたか）も人が神に勝っているが如くに”

黒部ダムが大自然を破壊した？

当時の世相を考えれば、岩垂六助のこの考えの示し方は、かなり、大胆なものであった。

『一』の立山信仰雑感は、その題のとおり、立山信仰についての自分の考えを述べたもので、学問的に意味のあるものではなかった。

ノートでははじめに、江戸時代に特に盛んになった万人講について、批判的な意見を述べ立てていた。

加賀能登越中の領主の懐を暖めるた

めの布教に 名を借りた金集めだと酷評し、藩の許可の許（もと）に一種の宝くじさえ発行していた寺社講中は、立山山岳信仰の名を汚すものだとの一文もあった。

ノートは昭和二十八年代のもので、ノート自体も紙質が悪く、黄ばんでいた。大部分が『一』のノートは立山山岳信仰の墮落した面にページが割かれていて、仲条は退屈した。

『二』ノートは他のノートの文面にくらべるとさらに専門的で、岩垂六助が特に、龍神の存在に関心を持っていた様子が窺えた。

ただし、仲条には退屈な章だった。

中国から伝わったとされる何種類もの龍の名が列記されていたが、これらも、事件とは直接関わりのないことと思え、仲条はページは飛ばし読みした。赤鉛筆で線を引いた箇所だけは、彼の眼を引いた。

『立山信仰密儀軌（みつぎき）に拠（よ）れば、立山のご来迎の時刻、山頂に霧がかかっているとき見られることがある唇気楼（ぶつげん）現象は立山の龍神、蛟龍（みずち）の御姿であるとされる。伝わる場所では、このか蛟龍は蛇が雉（きじ）と交わって卵を生み、それが地下数丈の所に入って、蛇になり、数百年を経て昇登して龍と成ると言われているが、その後の雷鳥を神の鳥とする立山信仰の雷神護符の考

え方から、雉とされるのは雷鳥のことを指すのではないか。雷神はそも龍神であり、雌雄相和して生まれた蛟龍なれば、妻が夫をなだめるが如く、雷鳥の護符が雷神を鎮めるという考え方は、充分に根拠のあることと思われる』
何かこの章句には意味があるのかも知れないと仲条は思った。

三冊のノートの中から、仲条は、

『黒い雷光の疾りたる闇に、吾れは眼のみ、雷の如く光る黒い雷鳥のご神体を見たり』『雷鳥の護符が雷神を鎮めるという考え方は充分に根拠のあることと思われる』の二箇所、雷鳥に関する記述を見つけ出した。

だが、この章句が、庄川征雄の首の切断口に貼られていたという『黒い雷鳥』を四羽あしらった魔符と、どのような関係があるのかは、今の仲条にはおよそ見当のつかないことであった。

だいいち、立山信仰について彼は、ほとんど何も知らないといってもよかった。

子供の頃から、北アルプスの山の姿には慣れ親しんできたが、神の山々については、これまでは特に関心を抱いたことはない。

ざっと眼をとおしたあと、もう一度、新しい発見はないかと、仲条はノートの中味を改めたが、元修験僧であったと聞いている岩垂六助の一文は、密教修験道の専門知識も必要のようで、

とてもものごと、仲条には全文は解読し
かねた。夜半になり彼はやっと眠りに
就いた。

（何か、夢見で、事件のヒントになる
ようなものがあらわれ出でないかな）
ベッドに入ったとき、仲条はそんなこ
とを考えていた。神頼みの思いを抱く
ほどに、仲条はいまは、暗中模索の状
態におかれていたようだった。

（第一章 了）